

第五章 神社仏閣

1. 郷土の神社

「村の鎮守の神さまの 今日はめでたい村祭り

ドンドンヒヤララ ドンヒヤララ
どんどんひやらら どんどんひやらら
朝からきこえる ふえ たいこ」

こう歌われた歌詞が、いま懐かしく思い出される。かつて日本列島の大半が緑ゆたかな田園に覆われていた日本を、「豊芦原の瑞穂の国」と呼び、豊年満作・五穀豊穣を祈る農耕文化があった。

各村には、鎮守の神さまが村人の心のよりどころとして、古くから奉られており今も季節ごとの祭礼が行われ、祭礼や「誕生祭」「七五三」「成人式」「厄祓」など人生の節目ふしめには多くの人々が参拝する。そこで各神社の由緒やどんな神さまが奉られているのかなどを紹介する。

■神明神社

神 紋	左三巴
鎮座地	四日市市尾平町2994
祭 神	天照大御神 天手力男命 品陀和氣命 萬幡豊秋津師比賣命 天太玉命 建速須佐之男命 天思兼命 大山祇命（山の神） 戸母都事解之男命 伊邪那岐命 速玉男命
祭 祀	例祭 10月7日
社 殿	本殿 神明造 拝殿 切妻造
境 内	193坪
氏 子	尾平町民



神明神社

由 緒 往古、御厨神明社と称す。

神明神社は、もと高柳（尾平町南）にあり、康平7年（1605）高柳神明宮と棟札・神明神社宝物古文書録にあり、元禄元年（1688）三滝川北なる御厨神田熊野神社内へ奉還し、その後、鎮守の森は、永久に榮え住民の乱れを鎮め、外敵・災難から守ってきたのである。

「神鳳鈔」曰く外宮高柳御厨一石一斗、「神領目録」に曰く高柳御園一石の内6月に五斗、9月に五斗、今に高柳神田、稻掛け松（神田五稻を掛けて祭る松なり）この神田

の米を以て毎年6月・9月に五斗づつ皇大神宮に奉納せしこと伝記にあり。

また、「神鳳鈔」外宮長松御厨四石、全廻永代寺の地とあり。「外宮神領目録」に長松神田三斗（12月）とある。

境内社 稲荷神社

境内社 一見靈社 一見靈社は、一見一族の氏神として奉られている。一見一族は、人皇56代清和天皇（859～876）の後胤（子孫）と伝えられる。紀元1602年（西暦942年）今より約千年前に、高塚（尾平町南）にあったものを現在の地へ移し奉祀したものである。



稻荷神社



一見靈社

■保曽井神社

神 紋 左三巴

鎮座地 四日市市曾井町758

祭 神 建速須佐之男命 菅原道真公 大山祇命（山の神）

祭 祀 例祭 10月10日

社 殿 本殿 切妻造 拝殿 流れ造

境 内 544坪
 氏 子 曽井町民
 由 緒 創立年代不詳。「神鳳鈔」に二宮曾井御厨上田六町四反十歩。三石(各6, 9, 12月)とあり、往古は、曾井御厨の神明社に起源するとも考えられる。



保曾井神社

寛政年間(1789~1800)の「保曾井物語」には、牛頭天王は曾井城(城主志村右衛門忠春、元亀元年(1570)8月落城)の氏神であり、天満社は東光山觀音寺(和泉式部とひすいの靈宝の伝説のある古寺)の鎮守であったと記されている。

明治40年9月、境内社の菅原神社(菅原道真公)、字東垣内の山の神社(大山祇命)、字西垣内の山祇神社(大山祇命)を合祀の上、社名を保曾井神社と単称する許可を受け、同年10月26日に合祀した。

■高角神田天白神社

神 紋 左三巴
 鎮座地 四日市市高角町312
 祭 神 天照大御神 大山祇命(山の神)
 祭 祀 例祭 10月9日
 社 殿 本殿 流れ造 拝殿 日吉造
 境 内 92坪
 氏 子 寺方町二区町民
 由 緒 当社は、明治3年の公的な諸社調査の折、祭神と由緒から「白山社」と登録された。

ところが高角村では、「神鳳鈔」に高



高角神田天白神社

角御厨十五町、内宮一石八斗、外宮一石五斗、(各6, 9, 12月)高角神田四斗三升とあり、伊勢神宮の御厨、神田とされていた。寺方村は、文禄3年(1594)に高角村より分村したものであり、天和元酉年(1681)の棟札に「天白御厨大明神 寺方村惣氏子川村市太夫云々」とある。また、当社の所在する旧字名「天下森」は地元の人々が「天白様」と称している。

以上から、「天白御厨」とは「神鳳鈔」に云う「高角御厨・神田」を指しており、御厨と神田を混同したものと考えられ、明治22年に現社名に変更された。

■神前神社

神 紋	右三巴
鎮座地	四日市市高角町507
祭 神	天照大御神神荒魂 建速須佐之男命 倉稻魂命(伊奈利神社) 大山祇命(山の神) 大穴牟遲命(事比羅神社)
祭 祀	例祭 10月9日
社 殿	本殿 神明造(天保時代) 拝殿 入母屋造(天保時代)
境 内	710坪
氏 子	高角町民
由 緒	当社は、延喜式内社で、創立年代不詳ながら延喜年間以前の創起と考えられる。古伝には、延喜5年(905)2月吉日とも伝えられる。「延喜式内社とは、延喜式50卷中、卷9、卷10の神名帳に記載された官社であり、原則として祈年祭に官幣、国幣の奉幣にあづかった神社で、全国に約三千社あり、朝明郡には24社、三重郡には6社ある格式の高い神社である。」



神前神社

「神鳳鈔」に、高角御厨十五町、内宮一石八斗、外宮一石五斗(各6, 9, 12月)同神田四斗三升を献すと言われ、高角御厨は神田であった。神社近辺の旧地名を神前と言い、あるいは神前左門、神前ヶ下とする地名からも、当社が式内社神前神社であることの証とされる。今も当地を神瀬と称する。

また、当社は牛頭天王と称され、天正の兵乱(1575年頃)において織田信長軍当地に進攻の時、神社仏閣に放火すれども土地の人間に神名を聞き、牛頭

天王と答えるは皆ゆるして火災を免れるとされ、神前神社も放火を免れた。

往古は、伊昌寺という別当寺（神仏習合説に基づいて神社に設けられた神宮寺）があつたが、現在ではその旧字名のみがのこる。

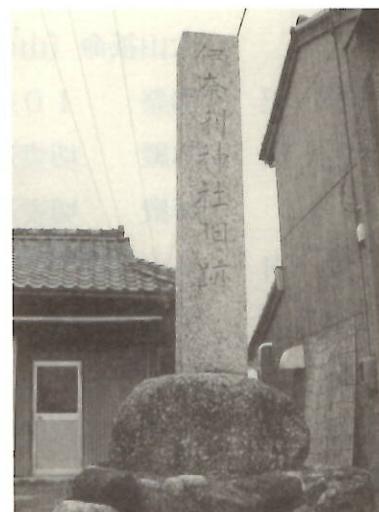
当社の鳥居は、往古より伊勢神宮の外宮の遷宮毎に、古材を拝領して建立の恒例があり、慶長(1600)の頃より続くとされる。明和6年(1769)からの棟札がある。

明治40年に合祀された伊奈利神社の跡地は、高角公会所の西約50mの字中之長地内にあり、昭和35年に記念碑が建立されている。

同じ明治40年には、山の神社も合祀された。事比羅神社は、神前神社の境内社で明治41年に合祀されている。



神前神社の鳥居



伊奈利神社の祈念碑

■若宮八幡社

神 紋	右三巴
鎮座地	四日市市寺方町254
祭 神	大さざき天皇 大山祇命（山の神）
祭 祀	例祭 10月9日
社 殿	本殿 切妻造(明治40年造営) 拝殿 流れ造(明治40年造営)
境 内	839坪
氏 子	寺方町一区町民
由 緒	境内地は、明治4年に寺方村字弁天254番地の七畝二十二歩とされ、同字弁天255番地の旧境内地一反九畝二十一歩は、上地され官有地となった。その



若宮八幡社

後、明治36年の国有林野法の公布に伴い、出願により後者255番地も境内地に編入され旧状に復した。

明治40年7月4日、大字寺方字北浦の無格社、山神社（大山祇命）を宇弁天の村社、若宮八幡社に合祀の上、社名を若宮八幡社と単称する許可を受け、同月28日に合祀した。

■菅原神社

神 紋	梅鉢
鎮座地	四日市市菅原町580
祭 神	菅原道真公 大山祇命（山の神）
祭 祀	例祭 10月12日
社 殿	本殿 切妻造（明治8年造営） 拝殿 切妻造（慶応3年造営）
境 内	411坪
境外地	1,198坪
氏 子	菅原町民

由 緒 貞享3丙寅年(1686)創立と社伝に言う。旧社格は村社である。

明治40年11月、大字西野字北浦の無格社、山神社（大山祇命）を菅原神社に合祀の上、社名を菅原神社と単称する許可を受け、同41年2月24日に合祀した。



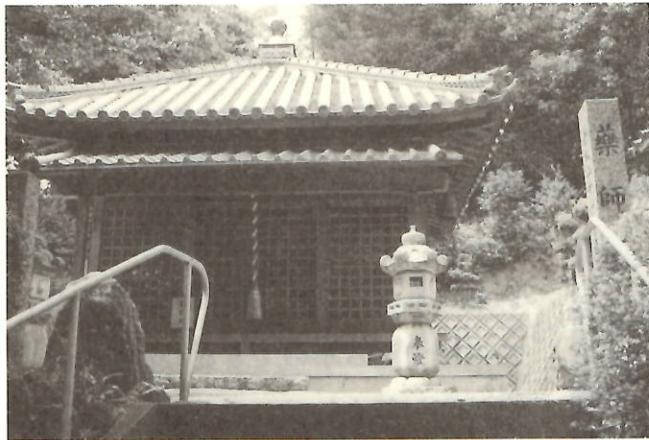
菅原神社

2. 郷土の寺院

■薬師堂

長松山 薬師堂（尾平町）

薬師堂は、旧長松山永代寺の境内（現在は四日市商業高校の敷地）の東南崖下にある間口2間、奥行1間半の仏堂であるが、その創設・由来は全く不明である。地区の古者によると、薬師堂はもともと永代寺の一堂であったと言われているが、永禄11年（1568）織田信長の北伊勢進攻の戦火に遭う前に、永代寺の衰退により堂宇が老朽化、倒壊して埋もれたものか、あるいは野仏のように祀られていて、埋もれたものを後世になって発掘し現在地に安置したものであろうと言う。



薬 師 堂

さらに、この薬師堂は長松山永代寺の遺跡であり「勢陽雜記」「伊勢國誌」「勢陽五鈴遺響」等の古書に記されており、中央厨子の中には、石像の薬師如来を中心にして三体の仏像を本尊とし、左右厨子の中に日光菩薩、月光菩薩、脇壇に十二神将を安置しており、古來母乳の靈験あらたかにして往時は参詣の人々盛んなりと伝えられる。

現在の仏堂は、古堂の老朽化が進み雨漏り等があり、地区住民の浄財を集めて平成4年に建替られている。建替の際、旧堂宇の内陣腰板の裏面に「天保3辰年（1832）6月 細工人京二条通り堺町角宮殿師竹内平四郎」の墨書が発見された、さらに室町時代の連歌狂歌が張られた板が内陣の腰板に使用されていたことにより、この薬師堂の前身はこの時代を遡ること8~90年以前の1750年代（寛延・宝暦年間）と推定され、江戸時代中期にはすでに建立されていたものと考えられる。

「薬師堂の経緯」

- 明治38年 欣淨寺の飛地として所管庁が認可。
- 昭和25年 寺社等国有境内地無償譲与の許可を受ける。
- 平成4年 新築落成・落慶法要。

「薬師堂安置の三尊・十二神将」

薬師仏は、薬師瑠璃光如来の略称で、普通は薬の壺を持っているが、当寺の薬師仏は何も持っていない。

薬師三尊 中央に薬師如来、脇士として左側に日光菩薩、右側に月光菩薩を配したもの総称である。

十二神将 薬師如来に属し、仏教の行者を護る十二の大将の総称で、諸仏の化身また刻を守る神ともいわれている。ここに安置されている十二神将は製作年代不明であるが、江戸時代末期のものと推定されている。



薬師如来と十二神将

■欣浄寺

浄土真宗高田派 厲穢山 欣浄寺 (尾平町)

寺号の「**厭穢山欣浄寺**」は、經典から出典したもので「**欣求淨土 厲離穢土**」からなる、意味は「けがれたこの現世を嫌って離れ、極樂淨土に往生することを願い求める。」



欣 浄 寺

ことで、本堂の造りにも極樂淨土を思わせるものがあり、欄間の彫刻には、この世で見る事のできない羽根だけの鳥の姿が刻まれている。また、本堂正面入口には「欣求淨土寺」の額が掲げられている。徳川家康の旗印も同じである。

当寺の前身と推測される長松山永代寺は、天平8年（736）行基菩薩の開

基にして創建され、その後、暦應年間（1338～1341）虎闘禪師来寺して禪宗（天台宗）に帰したと伝わるが仔細不詳である。永祿11年（1568）織田信長の北伊勢進攻の戦火により諸堂ことごとく焼失したと伝えられ、永代寺に住んでいた一人の僧とその僧に仕えた弟子が現在の地かその周辺に一字を創建して、いまの地に移ったものと思われる。

欣浄寺の中興初代は在惠院圓壽とあるが、その人の行跡は不明である。ただ正保3年（1646）に入寂したと伝えられている。前記の僧との関係は不明である。その後、寛永年間（1624～1643）かその少し前の年に、当山伝来最古と称する高田派第13世堯真上人（天正8年（1580）住持職）の六字名号を伝授して、真宗高田派に帰依し、厭穢山欣浄寺という寺名が与えられたと思われる。御本尊阿弥陀如来は作者不明であるが、その当時安置されたものと思われる。

弘法大師、天長年間（824～833）の作と伝えられる不動明王の像が永代寺の遺物として欣浄寺に安置されている。

本堂は、第4代秀月の時、元祿10年（1697）に一身田の長谷川金兵衛を棟梁として建立しており、延亨2年（1745）11月の「久居御領下 寺社御改帳」の中に「勢州三重郡尾平村高田門徒衆 欣浄寺 本寺高田門徒當国一身田専修寺 六間半四面但瓦葺 鐘樓堂九尺四方但瓦葺」とある。この本堂は第11代性全の時、安政元年（1854）に地震があり、そのため安政3年に曾井村の真



不動明王

教寺に移築しているが、現在真教寺は、廃寺となりその本堂も平成15年に解体撤去されている。この本堂の棟木は、遺品として欣浄寺の本堂に保管されている。



旧本堂棟木 墨書銘(欣浄寺第四世秀月)元禄10年2月 大工長谷川金兵衛善信

現在の本堂は、安政5年（1858）に菰野の高木藤造を棟梁として上棟式を行い、その後2年して落成している。この本堂は、平成5年に屋根瓦の総葺替等大修復を施行し、落慶法要を営んでいる。

鐘は寛文13年（1673）7月、津の辻越後守の作と銘記されており、今から330年遡るもので、市内で判明している江戸時代の作品の中でも貴重なものである。

■観音寺

臨済宗妙心寺派 保曽井山 観音寺 (曾井町)

開山は、神龜時代（1300年前）とされており、東光山当時、境内敷地二町歩で別院を有する格式のある寺院であった。近傍地名として楠木堂、行心坊谷、正専坊谷、円海谷など



観 音 寺

の地名が現在も残されている。寛政7年（1795）に書かれた「保曽井物語」によれば、天平元年（729）7月、飛鳥速足は聖武天皇より曾井を保つ意味で「保曽井」の姓を賜り、桑名郡等7郡を賞賜された。速足は多度大神宮に男児出産を祈願し神告により、十一面二大土靈像を河内国の仏師「春日」を作ら

せ、7郡の民を動員して精舎を建立した。天平時代聖武天皇が当国行幸の時、供の行基大僧正に供養を請い精舎を「東光山自在院觀音寺」と号して、その弟子「基弁」が住持となつた。

源平争乱（1200年頃）の時、高角城主若菜十郎永貞は東光山に放火し和泉式部にまつわる翡翠の玉簪を奪ったが、罰によって内室が狂病にかかり、玉簪を曾井家に返して謝罪した。東光山を中興した道隆禪師は、玉簪を北山之谷に埋蔵した。

その後、応仁の兵乱（1467～1477）により堂宇荒廃し人跡を絶ったが、大永2年（1522）志村治郎之助忠常が施主となり田圃^{たはたけ}を寄付し大伽藍を修復再興して、東光山安国院大永寺と寺号を改めた。大永寺の規模は次の通りであったと記されている。

金堂 間口13間	講堂 11間	九重大塔 7間	六時堂 7間
念仏堂 5間	祖師堂 5間	五百羅漢堂 9間	輪藏鼓樓仁王門回廊
[別院] 大日堂 7間	講堂 5間	鎮守社（八幡社）	寺家 12房

元亀元年（1570）織田信長の北伊勢進攻により、曾井城は落ち東光山も灰となった。文禄年間（1592～1595）寛成法師^{はいせい}はその廢頬^{なげ}を歎き、小庵を現在の地に構え諸仏を安置し寺名を改称して「細井山觀音寺」とした。以上が「保曾井物語」に書かれた昔語である。その後、明治20年編輯^{へんしゅう}の曾井村村誌によれば、堂宇再荒頬^{どうう なげ}により享保19年（1734）に中興の祖である大因禪師^{だいいん}は、当山靈蹟の廃退を嘆き堂宇を再建して諸尊を安置し「細井山觀音寺」として再興した。そして、天保8年（1837）に現在の寺号である「保曾井山觀音寺」に改めている。

明治6年の神仏お取り調べによる、排仏政策のため廃寺を申し付けられている。明治13年1月には村人が、当山の廃寺を嘆き田圃を寄付し永久維持の法をたて公に出願し再建する。

昭和28年6月8日に宗教法人「觀音寺」の認証を受け、本山「正法山妙心寺」（京都花園）のご開山無相大師の禪風を宗旨とし宗教活動をしている。現在、無住となっているため自治会が管理し、同宗同派の菰野町鶴川原下村の「禪林寺」の住職が代務者となっている。由緒によれば、「元文3年（1738）禪林寺湛道和尚代より同寺の末寺たり」とある。

本尊は十一面觀世音菩薩^{けんじやく}で、檜材の一木彫成像技法による伝惠心僧都の作で鎌倉時代（13世紀頃）製作と認められるが、一部修復（明治39年に一部補修の木札あり）があり文化財に指定されず秘仏である。概ね11年目毎のご開帳と春秋の彼岸会などがあり、信仰する人々が集い法事が営まれる。また本堂には、阿弥陀如來、地藏菩薩、子安觀音菩薩、稻荷大明神、弘法大師像、親鸞聖人像などが安置されている。宝物としては、川村文哉の筆による「往生要集絵図」がある。内容は地獄極楽の物語の掛絵図で四幅あり、ご開帳の折には説教師が節を付けて語るお絵説きが行われる。

寺院の正面石段のすぐ右手に「保曾井山觀音寺」の石碑があり、側面には「五穀成就村中安全」「天保8



十一面觀世音菩薩

丁酉年（1837）」の碑文がある。



往生要集絵図



観音寺の寺標

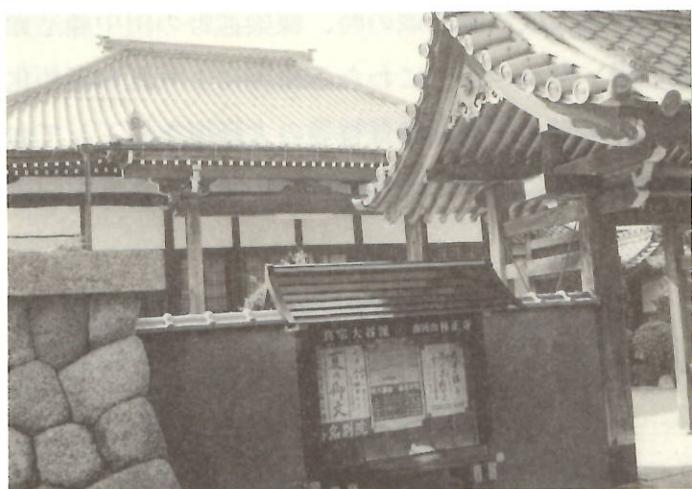
■林正寺

真宗大谷派 喬陵山 林正寺 (高角町)

創立は、慶長5年（1600）とあって、天下分け目の戦い、関ヶ原の合戦の年である。

開基「道西」は、永禄の頃（1570年前後）の戦乱をのがれ、諸国を流浪していてこの高

角の地に入ったものとされている、歳は60～70歳位で髪を落とし入道したことになる。「道西」は、本山より「阿弥陀如来画像」を免許下付（慶長5年2月28日免許）され、草庵に安置し、高角の人々と一緒に田畠を耕しながら、ひたすら念佛の教えを開いたのではないかと思われる。寺号免許 東本願寺末 慶長5庚子年2月29日 内田民部少



林 正 寺

輔寺は、その昔道場であったと印されている。

「道西」にとって、天正15年（1587）に高角に来住してから開創の年までの14年間は、文字通り茨の道であったに違いない、このような苦難の道を歩んだ「道西」は、開創のこの年の10月5日に入寂されている。

林正寺の所在地が、高角村字「觀音堂」という地名で、「伊正寺」（廃寺跡？）という地名の所に近いことを見ると、道場創設をこの地に選んだのも何か因縁があるのか。

道場創立から、何代目か不明であるが「道順」という人が願主になって本山から阿弥陀如来の木像が下付されている、包み紙の切れ端によると万治3年（1660）3月24日とあり、草創の年から数えて60年目にあたる。御本尊は、御丈壹尺とお姿が小さく本堂ではお顔を拝することができないので、現在は、庫裡のお内仏としてご移座されている。また、この木像は今を距ること約950年以前、惠心僧都の作と言われている。

慶長5年に道場として始まった林正寺は、宝永5年（1708）3月23日に下付状を受け、正式に「林正寺」という寺号が免許されたのである。寺号免許の願主は、「慶順」となっ



寺号免許

ている、明和年間（1764～1771）に編成された「法名覚帳」によると、「慶順」の項に「慈門父林正寺建立人也開基」とあり、これによって「慶順」師が林正寺という寺院としての初代を務めたこと

を物語っている。その後、一時中絶し廃寺同然となっていたが、明治32年に内田寶麟が普^{しん}山し、堂宇の荒廃した惨状を黙過するに忍びず極力修復され、由緒ある寺院としての面目を革められた。

現在の本堂は、弘化2年（1845）第11代住職大成法師35歳の時、棟梁菰野の田中藤造顕親により建立されているが、その後の大地震・台風・永年にわたる凍害により瓦の老朽化がいちじるしく進んでいたため、平成11年に本堂の屋根瓦総葺替等の大修復を施工しており、平成14年の玄関再建を待って、平成16年3月に本堂修復落慶法要と蓮如上人五百回御遠忌法要が営まれた。

■圓勝寺

浄土真宗本願寺派 流東山 圓勝寺

（高角町）

元和年間（1615～1623）和泉国住人の「北條織部」はこの地に浪遊し、医術を以て生業とした。「織部」は老後、僧侶となり法名を「釈徳玄」と号し、江戸



圓勝寺

時代初期の寛永14年（1637）に一寺を開基した、これが圓勝寺の開山である。当山の第2世住職は開祖と同じ名の「徳玄」で、第3世は「徳応」である。

第11世住職「専教」は、京都本山邦楽部に所属して「雅樂」を習得し、これを次男の「真教」に伝授し、「真教」は明治時代末期に村人を寺に集めてこれを教え「雅樂」を高角に広めている。

平成14年に本堂の屋根瓦総葺替等の大修復が落成している。

■金剛寺

天台宗 金徳山 金剛寺 法光院 （高角町）

当寺院は「法光院」と称され、その昔「高角山大日寺」を奥の院とする伽藍の一宇として往時は法燈の絶える日もなく、毎夜この寺院より燈火を奥の院へ運んだと伝えられるが、寺の資料は「大日寺」が焼討ちにあったのと同じ永祿10年（1567）に織田信長の北伊勢進攻の兵火により焼かれており詳細は不明である。

この寺には、「法光院」という院号があるが、院は山号・寺号・院号の順にあって院は寺に付隨するものと云われている。このことから金剛寺は、大日寺を奥の院とする大伽藍の一部であると考えられている。

その後、寺は文政年間（1818～1829）の再興により現在の地に建てられた。

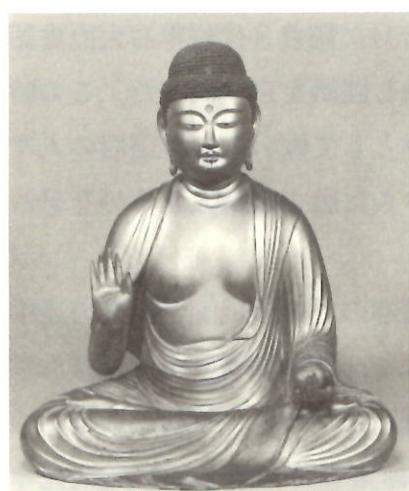


金剛寺

天台宗の寺は、僧侶の修行を目的としており、境内にはそれらしき建物がある。

本尊は、「薬師如来座像」で、当山の本尊は木造 彫眼像高43.5cmで、やや大きめの肉髻に細かく刻む螺旋髮や強いなで肩等に平安時代後期の特色がよく現れているが、像底に貼られた後世の底板のため詳細は不明である。

ここには、薬師如来に仕える「十二神将」という仏があり、この仏は体に甲冑を着けた武将の姿で頭上には十二支獸を表し、方位や時刻の守り神とされている。十二



薬師如来座像

支獸とは、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」である。色彩鮮やかで、持物・道具も様々で近頃では、守護神として親しまれている。

境内には、江戸時代末期から明治時代初期にかけて近隣の子供を集めて寺子屋を開いた「慈忍僧都」の碑が、その教え子らによって建てられている。

平成12年に本堂の屋根瓦総吹替等、平成の大修復が落成し、本堂修復落慶法会と薬師如来ご開帳法会を営んでいる。

当寺では、以前「花祭り」が毎年4月8日に催されていたが、昭和30年頃から途絶えており約50年間中断していたのを、平成16年に再開されている。

■大日寺

天台宗 高角山 大日寺 (寺方町)

勢陽五鈴遺響 (天保4年 (1833) 安岡親毅) 三重郡卷之弐寺方の項によれば「高角の北にあり小山に傍て民居す四日市宿より西2里、寺良賀多と訓す高角と一邑にて南北に別れり、寺方の名義は高角山大日寺あり故に名く……云々」とある。



大日寺

天台宗の総本山は滋賀県大津市坂本にある比叡山延暦寺で延暦7年 (788) に最澄が開基した寺である。

天平8年 (736) に行基菩薩が、伊勢の国の国分寺を鈴鹿郡国府に建立したのがこの寺の始まりで、それから約480年後、人皇84代順徳天皇の時代、建保2年 (1214) 3月に鎌倉3代將軍右大臣實朝

が京へ上洛する時、尾州大野浦から海を渡って塩浜浦に上陸し陸路を京へ向った。この時国府の人々は、平家の残党に組して將軍の上洛を阻止しようとして戦いとなり国府の人々は、戦火を免れるため国分寺の仏像を一旦山に隠したが、さらに戦火が拡大するのを恐れて仏像を当地の大日寺に移した。

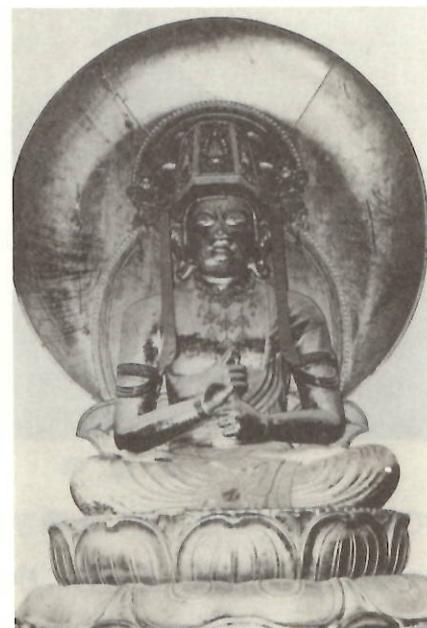
その後、建保年間奈良東大寺の僧、俊乗坊重源が東大寺再建のための全国大勧進の途中この仏像を押し靈像であると感じ、この事を將軍に進言された、將軍實朝は大変喜ばれ堂塔を建立、祈願所と定め桑名郡の古野、美鹿 (桑名市多度町) と寺方の3ヶ村を大日寺の寺領として寄進された。しかしに、大日寺の地は、神鳳鈔極楽寺の御厨の地で元久元年 (1204) 三日平氏の乱で高角城が落城し共に廃れ、その後鈴鹿より移された仏像を仮安置

していたが實朝の再建により祈願所と定められ、大日寺と称するようになった。

人皇106代正親町天皇の時代、永祿10年（1567）織田信長の北伊勢進攻の折、瀧川左近一益らの戦火により当寺の堂塔も焼失したが、寺の衆徒は、事前に仏像を裏山に隠し戦後仮堂に安置した。しかし、さらに戦乱は続き寺も次第に荒廃していった。徳川8代將軍吉宗の時代、享保年間（1716～1735）尾州八事山の僧、泰寿律師が当寺に留錫の折、如來の夢のお告げを受け、本尊の体内より胎藏界大日如來の尊像を取り出し別に奉安したと伝えられる。文化6年（1809）当寺中興の祖、圓周和尚の發願で本堂が再建され現在の大日寺の姿がほぼ整った。寺をとりまく地名に、大門、門口、御摩堂等が残っている。

明治9年に、現在の御拝が修理され、昭和2年に、山号寺号を刻んだ自然石の碑が現在の参道南端の位置に、移設され大日寺の構えが次第に整った。昭和19年の東南海地震と昭和34年の伊勢湾台風により、本堂の傷みがはげしく昭和49年に屋根の修理が行われた。

本尊は「金剛界大日如來座像」で、座像は檜材による寄木造りで丈六坐像と一般的に云われ、蓮台座から光背までが約5.3m、像高3.14m、膝張り約2.2m、蓮台の高さ約90cmの巨大な座像で大日如來像としては、屈指の大きさである。当座像は、頭に美しい六角の宝冠を頂き、白毫には水晶を嵌入し、胸には瓔珞、腕には肘釤、腕釤を着け、両手は智拳印を胸のあたりで結んでいる。作者不明（郷土誌「かんざき」には、天平8年（736）行基菩薩の作とあるが詳細不明）で、寺の伝記では室町時代の作とあるが、装飾品の彫りや形、視線を下方に向けた両眼、張のある面相の輪郭、両手の安定した構え、しっかりした体躯の肉取り等から平安時代後期の作と認定されており、中央（都）の仏師により造像されたものと推測されている。昭和31年に、四日市市指定有形文化財に指定されている。



大日如來座像

■光徳寺

浄土真宗本願寺派 寺方山 光徳寺（寺方町）

永祿10年（1567）の秋、伊勢の国司、北畠具教と織田信長が合戦中、信長軍の先鋒は瀧川左近一益で北勢地区の北畠側の諸城を攻め落としていた。その折瀧川軍は大日寺に対し寺を自軍の休憩所にしたいと申し入れた。それに対し寺の僧侶は、「辱しみを忍んでまで、



光徳寺

慈悲の靈場である寺を軍務の塵にまみれさせることなどできない。」と嘆き、申し入れを拒否した。それに怒った瀧川軍は、大日寺の堂塔仏閣のすべてを焼き払いその上寺の領地まで没収した。僧侶たちも四方に離散し後には本尊だけが残った。そして村人達は、小さな堂を作り本尊を安置した。

慶長年間（1596～1614）に、当庵主

であった僧「専信」は、本願寺准如上人に帰依し、その弟子の僧「教専」に至って、ついに聖道門（天台宗）を逃れて浄土真宗となり光徳寺と名を改め、村人達も心を一つにしてこれに従い本願寺の末寺となつた。

「教専」和尚が寛文9年（1669）に入寂したその年に、藩主藤堂による検地があり、寺の境内は年貢御免を、また三本松の地にも領地を許され、それが現在では寺新田と言っている。その後、寺はしばらくの間無住であったが、当時隣接の西勝寺、福泉寺が当村に門徒を持っていた関係から、両寺の門徒が本願寺に実情を訴えたところ本山から沙汰があり、門徒は富田村の長福寺（現、三光寺）に一時預かりとなつた。

その後、天和元年（1681）に再び本山から沙汰があり、当庵主老職であった上原兵庫の弟で出家して「覚元」と名乗った僧侶を住職に据え、それから三代続いてその子孫が寺を守つた。その後、「覚惠」住職の時に「法順」と云う禪僧が津から来て、門徒の代表として本堂再建の願人となり、本堂が明和7年（1770）に再建された。



お七夜のお勤め